

---

# 情欲科学

椎名最子

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

情欲科学

### 【Nコード】

N7009C

### 【作者名】

椎名最子

### 【あらすじ】

その日を境に、いつもぽりぽりと齧っていたミントのタブレットを私はノンシュガータイプへと変えた。そこに深い意味があったのかもしれないし、別にただの気紛れだったのかもしれない。

その日を境に、いつもぽりぽりと齧っていたミントのタブレットを私はノンシュガータイプへと変えた。そこに深い意味はあったのかもしれないし、別にただの気紛れだったのかもしれない。しかし、彼の一言が私の中において大きな何かを示しているには変わりが無かった。

HRを終え、掃除もさつさと済ませ、私は制服のポケットからまた小さな白いタブレットを出す。雪の結晶よりほんのりと薄い黄色がかかった新発売のシトラスミントだ。二、三粒纏めて舌内に放り込み、躊躇わず奥歯で噛み砕く。鼻孔から突き抜ける澄んだ清涼感、この雪が降る町の身を切る様な寒さにとてもよく似ていた。

「俺さあ、甘いもの食えない体だから」

思い出すのはそう言ってせせら笑う、四十三歳の国語教師。独身。今年度 正確には去年の四月 うちの高校に転勤してきたばかりだったが、人当たりのいい笑顔とひょうきんさですぐに校内に溶け込んだ。飄々と明るくて、年の割りに嫌味臭くない無邪気な子供っぽさの残る彼は、他の生徒からの人気もそこに高いようだった。

そんな彼が何故突然、私にそんな事を話してくれたのかは知らない。煩いくらい蝉が喚く、夏の帰り道の事だった。

うちの学校だけなのか、或いは何処でもそうなのか。世間情報に疎い私は知らないし別に興味も無いのだが、教員達は校舎内での喫煙を禁止されているらしい。

煙アレルギーの小夜子なんかは涼しい顔をして「当然だわ」なんて呟いていたけど、私は別に副流煙の一つや二つ……寧ろ好きだった。

大人は言う。煙草は二十歳になってから吸いなさい。煙草は身体に害を与える。口を酸っぱくして私達「未成年」にその言葉を叩き込む。そして、その「未成年」の目の前で威風堂々それを焚くのだ。彼らの口を零れた煙は銘柄によって異なる香り、狭い室内で混ざり混ざって不愉快な馬鹿笑いと溶け合って私の鼻から耳から皮膚から、体内へと侵入してくる。血液に溶け込んで一瞬で二周、脳味噌から爪先までを犯すのだ。

直接自分が法を犯すわけではない上に何処にでも見る風景だろうが、あの恍惚とした罪悪感、善を気取った大人の失態、まるで共犯者にもなつたみたいで忘れる事が出来ないでいた。

そして幼い頃から私は、二十歳になったら煙草を吸おうを固く心に決めたのだった。

あれは三月十四日。卒業式も終わって校内が高校入試やら合格発表やらで慌しく駆け回っていたある日、私の留年が決まった。理由は単純明快、出席日数の不足だ。

私の反応も親の反応も、周りの教師の反応だってそれはそれは淡泊なものだった。半ば事務的にその事を告げ、担任は去っていく。両親も諦めた様な投遣りな態度で重苦しい溜息を零していた。

見上げた窓越しのとても爽快に晴れた青空は所々に薄い白い流れ雲が遠く広がっていて、そんな彼らを嘲笑うように何も言わないでただ見下ろしていたのを覚えている。

ブーツに履き替え玄関から外に出ると、解けた雪に大分地面がぬかるんでいた。水が跳ねない様に一步一步進んで、何気なく振り返る。じんわりと残っていた足跡も、柔らかい黄色い光に包まれてその輪郭を徐々に無くしていった。

別に、そんな事、何とも思わない。

ぬかるみに足を取られない様に真っ直ぐ背筋を伸ばす。真正面だけを見据えて、私は前に進めばいい。留年がなあに。今更退学も怖くない。私がどんな大人になるかなんて、誰も教えてくれないのだ

から。

四月になれば元・クラスメート達は「進学校の受験生」という大きく重たい看板を背負い、大学合格への長く険しい登り坂を歩く事になるんだろう。まるで他人行儀な自分に何故か笑いが込み上げる行き場は違えど、かつては同じ結果を追い求めていたはずだったのに。

「おっ、宮城。なに笑ってんだ？」

突然背後から掛けられた声にびくりと振り返る。自分でも、些か大袈裟過ぎた様な反応だった。職員用の玄関から、マフラーに耳当てに脛迄隠れる大きなジャンパーコートの完全装備。人懐こい笑顔は、時々まるで作り笑いのように感じて、私は肩に力が入る。ポケットの中のタブレットケースを汗ばんだ手の平でぎゅっと握り締めた。

「……先生」

「どうしたー？　なんかおもしれえ事でもあったかー？」

先生は何処か違う地方出身らしく、中々聞きなれないニュアンスの話し方をする。まあ、実際それが彼の愛嬌を際立たせているんだろうなんて勝手に勝手に分析しているだけだが。

「先生、私、留年だそうです。二年生をもう一回」

作り笑いなら誰にも負けない、と思う。唇の端を左右に引っ張って、出来るだけ肩の力を抜いて、両目を薄く細める。さつきは微塵も感じなかったのに、急に眼球がどうしようも無い位熱を持った気がした。

さくさくと踏み進めた三步。たった三步が酷く長く感じた。世界

が私を中心にひたすら、ただひたすら途方も無く広がっていく錯覚を覚えた。

「あー……そうか」

先生は左のポケットから青いパッケージの煙草を取り出す。私は視線を前方に落としたまま傍らのそれを盗み見る。

そして、無難な反応だね。と、心の中で淡々と誰にも聞こえない悪態を吐くのだ。

「でもまあ、もう一年……いや、二年か。ほら、俺と一緒にいれろし」

「……そうですね」

「嫌か？」

「別に。先生嫌いじゃないし。……あ、チョコレートでも食べますか？」

ポケットの中をまさぐると指先にはあのタブレットケースが当たる。プラスチックが微かにぶつかる音、まだ半分くらいそれは残っていた。今思えばそれは私なりの、精一杯の抵抗だった。

「ああ、いや。いいよ」

上辺に笑顔は浮かべたままで、先生は少しだけ表情を曇らせる。甘いものが好きだという事、それ位知っている。顔を隠すように緩く右手を前で振る。そして歩調を緩やかに、今は廃墟と化した空家の軒下へと足を進めていく。

校門を出て徒歩一分。そこが唯一、彼に喫煙を許された場所だった。

私もつられるように歩調を緩めはしたのだが、立ち止まる事は決

していない。私がそこにいる限り、彼はライターを出さないだろう。さようなら。また明日。そんな意味が込められたであろう彼の右手が少しだけ上がる。ほんの少しだけ顎を引き私はそれに答えた。左手の青いパッケージ、反射光が更に反射して光る。彼の口許を覆うように隠して、慣れた手付きで抜き取る一本の白い煙草。

「先生」

私は足を止めて振り返る。

澄んでいるとはいえないが、先程より少し開いた距離でもちゃんと届く位の声を発する。

「……先生、その銘柄、教えて下さい」

両目を細めて口端を引いた。私は上手く笑えただろうか。

彼は一瞬戸惑って、そして確認するように自らの左手を確かめる。無邪気な笑顔の向こう側にあるささやかな疑問を、敢えて見て見ぬフリをした。

水戸黄門でも装って、真っ直ぐ私へと向けられる青。

「マイセンの3。……この、『3』ってのがポイントで」

先生の丸い指が、青いパッケージに抜き取られた白を指す。私はそれに手を振って、背中を向けて歩き出す。

言葉にならない何か、一気に喉奥まで込み上げて息苦しさに俯いて歩いた。奥歯を噛み締める。ミントはそこにもう無い。

大分歩いて、もう一度だけ振り返った。相変わらず廃墟の軒下には雪だるまみたいな影がいた。

透明に近い白い煙は青々としたあの空に吸い込まれる様に昇っていった、副流煙は風に溶け私の両目に沁みって消えた。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7009c/>

---

情欲科学

2009年7月2日03時58分発行